わかちあいプロジェクト NEWS No.16

2000 DECEMBER

左から東京国際マラソンをめざすデベサ　アンバチョウ　ラカウ

“継続的な支援”を可能にするために

高村　憲明　わかちあいプロジェクト　スタッフ

93年の古着支援以来、わかちあいプロジェクトはカクマ難民キャンプを支援し続けてきました。94年以降今日に至るまで、その活動の中心は、毎年夏にボランティアのグループをキャンプに派遣して病院や図書館などの建物を建設し、寄付することでした。しかし、今年からは建物を寄付するだけでなく、そこでの人々の日々の活動を継続的に支援していこうということになりました。そして、その“継続的な支援”を可能にするための常勤スタッフとして、私が年間を通してカクマ難民キャンプで働くことになりました。

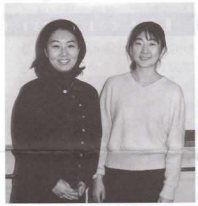
私たちがカクマ難民キャンプでこれから支援していくのは、次ぎの三つのプログラムです。

一つは、*Youth & Culture Program*（青少年のためのプログラム）です。「難民キャンプという所は、“何かをしたい”“何かになりたい”そういう希望を抱くのが当然な若者たちがいるような場所じゃない。」あるスーダン人難民はこう言いました。しかし、戦争や迫害から逃れて祖国を追われてここに来た若者たちには、ここで生きるしか道はないのです。そんな難民キャンプの状況において、各種文化活動を通して、少しでも若者たちが生きがいを見つけ将来に対する希望を持てるようにしようというのがこのY&C Programの趣旨です。

ページ3に続く

コーヒー紅茶プロジェクト 2

タイ山岳地域のコーヒー生産者と共同で、タイ・チェンマイにコーヒーショップを！



一月に派遣される村山さんと中島さん

わかちあいプロジェクトでは、1997年からタイ北部の山岳地域のコーヒー生産者と関わり、村の人たちの自立支援を行ってきました。麻薬の原料となるケシ栽培が長く行われていた同地域では、貧困が深刻な問題です。1970年代のコーヒー栽培導入以来、力の弱い小規模生産者は、村まで買い付けに来る仲買業者に依存しており、安い値段で売らざるをえなかったのです。

1997年末には、わかちあいプロジェクトの協力で村に生産協同組合もでき、98年9月には、フェアトレードラベル運動の国際ネットワーク組織FLO（Fairtrade Labelling Organizations International）にも生産者登録をしました。わかちあいプロジェクトでも、97年から毎年彼らからコーヒーを輸入し日本で販売しておりますが、コクがあっておいしいとご好評いただいています。生産技術も年々向上し、以前に比べれば格段に良質のコーヒー豆を栽培できるようになっています。

しかし、今だヨーロッパなど大きなコーヒーマーケットとの接点はなく、輸出先はわかちあいプロジェクトのみというのが現状で、世界各国に向けてのマーケティングが重要課題となっています。

数年前から、タイ国内での販売促進のためチェンマイにコーヒーショップをオープンできないかと現地の生産者側と検討を続けてまいりました。チェンマイは観光地であり外国人も多いため、世界に向けてのタイ山岳民コーヒーの紹介という意味でも適地です。

このたび、日本から早稲田大学大学院生の村山恵理さんが2001年1月から1年間学校を休学して、ショップ立ち上げにボランティアでかかわってくださることになりました。コーヒー生産者だけでなく、タイのYMCAにも協力してもらい、タイの人たちと共同で進めていきます。ホームページなどを通しての世界に向けての情報発信にも協力する計画です。タイ山岳民が丹精こめて作ったコーヒーが、世界に広がりますよう、皆様のご支援、ご協力をよろしくお願いします

タイ・コーヒー生産者支援プロジェクト	募金目標金額	150万円
●コーヒー豆焙煎機ほか	30万円	
●村山派遣費用	70万円	タイ人マネージャーの人件費や店舗の家賃などは売上げでカバー
●開店のための諸費用	50万円	